

2.1 導関数

鈴木 讓

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

2.1 導関数

鈴木 讓

2009年5月27日(水)

目次

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

- 1 関数の極限: 復習
- 2 定理 2.1
- 3 定理 2.2
- 4 微分可能な関数
- 5 定理 2.5
- 6 定理 2.6
- 7 諸定義

微分係数と微分可能性

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

平均変化率 $\frac{f(b) - f(a)}{b - a}$

瞬間変化率 平均変化率の $b \rightarrow a$ の極限 (接線の傾き)

定義 ($x = a$ で微分可能)

$x = a$ での微分係数 $\lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a}$ が存在

定義 ($x = a$ で右微分可能)

$x = a$ での右微分係数 $\lim_{x \rightarrow a+0} \frac{f(x) - f(a)}{x - a}$ が存在

(左微分可能、左微分係数も同様に定義される)

$$\text{微分可能} \iff \text{右微分係数} = \text{左微分係数}$$

例 2.1

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

$$f(x) = |x|$$

$$\lim_{x \rightarrow +0} f(x) = 1$$

$$\lim_{x \rightarrow -0} f(x) = -1$$

(右微分可能かつ左微分可能だが、右微分係数 \neq 左微分係数)

$f(x)$ は、 $x = 0$ で微分可能ではない

例 2.2

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

$$f(x) = \begin{cases} x \sin \frac{1}{x}, & x \neq 0 \\ 0, & x = 0 \end{cases}$$

$$\frac{f(h) - f(0)}{h - 0} = \sin \frac{1}{h}$$

(連続だが、右微分可能ではない、左微分可能ではない)

$f(x)$ は、 $x = 0$ で微分可能ではない

定理 2.1

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

定理 ($f(x)$ が $x = a$ で微分可能であるための必要十分条件)

$f(x)$ が $x = a$ の近傍で以下のようにかける

$$f(x) = f(a) + (x - a)A + (x - a)B(x)$$

A : 定数

$B(x)$: a の近傍で定義、 $x = a$ で連続、 $B(a) = 0$

($A = f'(a)$ が成立する)

定理 2.1(続)

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

証明: $f(x)$ が微分可能であれば、 a の近傍で

$$B(x) := \begin{cases} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} - f'(a), & x \neq a \\ 0, & x = a \end{cases}$$

とおくと、 $x = a$ で連続かつ、 a の近傍で

$$f(x) = f(a) + (x - a)f'(a) + (x - a)B(x)$$

逆に、 $f(x)$ が a の近傍で、上式でかけると、 $x \neq a$ のとき、

$$\frac{f(x) - f(a)}{x - a} = A + B(x)$$

$$\lim_{x \rightarrow a} (A + B(x)) = A \text{ より、} \lim_{x \rightarrow a} \frac{f(x) - f(a)}{x - a} = A$$

定理 2.1 の系

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

系

$f(x)$ が $x = a$ で微分可能なら、 $x = a$ で連続

証明: 微分可能であれば、以下のようにかけるのであるから、
 $\lim_{x \rightarrow a} f(x) = f(a)$ となる。

$$f(x) = f(a) + (x - a)A + (x - a)B(x)$$

A: 定数

B(x): a の近傍で定義、 $x = a$ で連続、 $B(a) = 0$

逆は成立しない。 例 2.1, 例 2.2

定理 2.2

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

定理 (2 関数が微分可能なら、和、差、積、商も微分可能)

$f(x), g(x)$ が $x = a$ で微分可能ならば、 $f(x) \pm g(x), cf(x)$ (c : 定数), $f(x)g(x), f(x)/g(x)$ ($g(a) \neq 0$) も微分可能で、

- ① $(f + g)'(a) = f'(a) + g'(a)$
- ② $(f - g)' = f'(a) + g'(a)$
- ③ $(cf)'(a) = cf'(a)$
- ④ $(fg)'(a) = f'(a)g(a) + f(a)g'(a)$
- ⑤ $\left(\frac{f}{g}\right)'(a) = \frac{f'(a)g(a) - f(a)g'(a)}{g(a)^2}$

定理 2.2(続)

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

証明: 定理 2.1 より、 $A := f'(a)$, $B := g'(a)$ として、

$$f(x) := f(a) + (x - a)A + (x - a)B(x)$$

$$g(x) := g(a) + (x - a)C + (x - a)D(x)$$

$$f(x) \pm g(x) = f(a) + g(a) + (x - a)(A \pm C) + (x - a)\{B(x) + D(x)\}$$

$$cf(x) = cf(a) + (x - a)cA + (x - a)cB(x)$$

$$f(x)g(x) = f(a)g(a) + (x - a)\{Ag(a) + f(a)C\} + (x - a)E(x)$$

$$E(x) := B(x)\{g(a) + (x - a)(C + D(x))\} \\ + D(x)\{f(a) + (x - a)(A + B(x))\}$$

$E(a) = 0$, $\lim_{x \rightarrow a} E(x) = 0$ より、 $x = a$ で連続

定理 2.2(続)

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

証明: $g(x)$ は $x = a$ で連続で、 $g(a) \neq 0$

$$\begin{aligned} & \frac{f(x)}{g(x)} - \frac{f(a)}{g(a)} \\ = & \frac{(x-a)(A+B(x))g(a) - f(a)(x-a)(C+D(x))}{\{g(a) + (x-a)(C+D(x))\}g(a)} \\ & \frac{(x-a)\{Ag(a) - f(a)C\} + (x-a)\{B(x)g(a) - f(a)D(x)\}}{g(a)^2 + (x-a)(C+D(x))g(a)} \\ = & (x-a) \frac{Ag(a) - f(a)C}{g(a)^2} + (x-a)F(x) \end{aligned}$$

$F(x)$ は、 $x = a$ の近傍で定義される関数で、
 $F(a) = 0$, $\lim_{x \rightarrow a} F(x) = 0$ より、 $x = a$ で連続

微分可能な関数

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

定義 (微分可能な関数)

定義域の各点で微分可能な関数

定義 (端点 a, b で微分可能)

a で右微分可能、 b で左微分可能

定義 (f の導関数)

f の定義域にその微分係数を対応させる関数 f'

定義 (f を微分する)

f の導関数 f' を求めること

定理 2.1 の系 \implies 定理 2.3

定理 2.2 \implies 定理 2.4

定理 2.5

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

定理 (合成関数の微分法)

微分可能な 2 つの関数 $y = f(x)$, $z = g(y)$ の合成関数 $z = (g \circ f)(x) := g(f(x))$ は微分可能で、

$$(g \circ f)'(x) := g'(f(x))f'(x)$$

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \frac{dy}{dx}$$

定理 2.5(続)

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

証明: 定理 2.1 より、 $b = f(a)$, $A := f'(a)$, $C := g'(b)$ として、

$$f(x) := f(a) + (x - a)A + (x - a)B(x)$$

$$g(x) := g(a) + (x - a)C + (x - a)D(x)$$

$$\begin{aligned}g(f(x)) &= g(b) + (x - a)(A + B(x))(C + D(f(x))) \\ &= g(b) + (x - a)CA + (x - a)E(x)\end{aligned}$$

$$E(x) := B(x)C + (A + B(x))D(f(x))$$

は、 $x = a$ の近傍で定義された $E(a) = 0$ 、 $\lim_{x \rightarrow a} E(x) = 0$ より、 a で連続。 $(g \circ f)$ は、 $x = a$ で微分可能

$$(g \circ f)'(a) = CA = g'(f(a))f'(a)$$

定理 2.6

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

定理 (逆関数の微分法)

$y = f(x)$ が (閉または開) 区間で単調で微分可能ならば、その逆関数 $x = f^{-1}(y)$ は $f'(x) \neq 0$ となる y で微分可能で、

$$(f^{-1})' = \frac{1}{f'(x)}$$

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy} \frac{dy}{dx}$$

定理 2.6(続)

2.1 導関数

鈴木 譲

目次

関数の極
限: 復習

定理 2.1

定理 2.2

微分可能な
関数

定理 2.5

定理 2.6

諸定義

証明: 定理 2.1 より、 $b = f(a)$ として、

$$f(x) - b = (x - a)f'(a) + (x - a)B(x)$$

$f'(a) \neq 0$ ならば、 b の近傍で

$$f^{-1}(y) - a = (y - b)\frac{1}{f'(a)} + (y - b)C(y)$$

$$C(y) := \frac{-B(f^{-1}(y))}{f'(a)^2 + f'(a)B(f^{-1}(y))}$$

$C(b) = 0$ 、 $\lim_{y \rightarrow b} C(y) = 0$ より、 $y = b$ で連続。ゆえに
 $x = f^{-1}(y)$ は b で微分可能

$$(f^{-1}(b))' = \frac{1}{f'(a)}$$

双曲線サイン、双曲線コサイン、双曲線タンジェント

$$\sinh x := \frac{e^x - e^{-x}}{2}, \cosh x := \frac{e^x + e^{-x}}{2}, \tanh x := \frac{e^x - e^{-x}}{e^x + e^{-x}}$$

n 回微分可能性、第 n 次導関数

$$y^{(n)}, f^{(n)}(x), \frac{d^n y}{dx^n}, \frac{d^n f}{dx^n}$$